

教職科目「教育の思想と原理」の授業改善に関する実践的研究

Practical research on class improvement of “Principles and Thoughts of Education”

次世代教育学部教育経営学科

伊住 継行

IZUMI, Tsuguyuki

Department of Management for Education

Faculty of Education for Future Generations

体育学部体育学科

田邊 良祐

TANABE, Ryosuke

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

要約：本報告は、2019年度における「教育の思想と原理」の授業実践について報告を行うものである。「教育の思想と原理」は次世代教育学部教育経営学科ならびにこども発達学科、体育学部体育学科の3つの学科の教職志望、教員免許状取得希望学生に対してそれぞれの学科で開講されている。本報告では、教育経営学科、体育学科の学生向けに開講している授業実践について、それぞれの担当者が報告を行うものである。担当者間で授業内容を共通化するべく議論し、実践を行ったが、学科や、履修学生の興味関心の違いなどから、それぞれの授業者間で、授業実践に若干の差異が見られた。

キーワード：教師教育、教員養成、教員養成カリキュラム、授業改善、教育原理

1. はじめに

本報告は、2019年度に環太平洋大学において開講された「教育の思想と原理」（以下、本科目と略記する。）に関する実践報告である。

環太平洋大学において、本科目は次世代教育学部、体育学部の「専門基礎」科目に分類されると同時に、教員免許状を取得するための必修科目として位置づけられている⁽¹⁾。標準履修年次は1年次としており、入学後教職を目指す、あるいは教員免許状取得を目指す学生が、「教職論」「教育心理学」等と同じく、教員としての実践的指導力を育てていく上で、導入的な科目として位置づけられている。

教員養成に関する授業方法の改善や、教員養成カリキュラムに関する研究は、歴史研究、国際比較研究、政策研究、授業実践研究と、様々な方法で研究が行われ、多くの蓄積がある⁽²⁾。本報告に沿って言えば、教員養成の授業改善に関する研究として、例えば松永ら（2019）は、必修化された小学校でのプログラミング教育に関して、教員養成課程に在籍する学生向けの授業計画と、授業実践について報告を行っている。また、飯島ら（2019）は、教員養成課程における学生の授業力の形成と向上に向けて、模擬授業を効果的に実施する方策について「インストラクショナルデザイン理論」に準拠し、検討を行っている。

しかしながら、教員養成における、授業改善に関する実践報告等について論文検索サイト等で縦覧したものの、教育職員免許法施行規則にある「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を取り扱う実践は管見の限り見当たらない。また、検索の範囲を「教育の基礎理論に関する科目」全体に広げても同様であった。

平成29・30年度版のいわゆる新学習指導要領が告示され、新たな教科の導入や、「主体的対話的で深い学びによる授業改善」等が求められることとなった。そうした背景も重なり、授業担当者としては、今後の予測困難な時代の学校教育を担う教員をいかに育てるかといった点に大きな関心があった。教職を目指す、あるいは教員免許状の取得を目指す学生に対して、単にその科目の知識の獲得だけではなく、科目を通して考え、結論付ける力、いわゆる「課題対応能力」といった力をどのようにして育成するか授業を構想する段階で検討を重ね、授業を実践した。本報告では、本科目の実践のみならず、どのような意図をもって本科目を構想したのか、という点も含め報告する。これにより、本研究を、今後教員養成における授業実践研究に昇華させるための足掛かりとしたい。

2. 「教育の思想と原理」の授業概要

環太平洋大学では、次世代教育学部教育経営学科、次世代教育学部こども発達学科、体育学部体育学科が教職課程認定を受け、教員養成を行っている。授業履修者数の調整と、取得免許状の違いを理由として、教育の思想と原理（以下、本科目と略記する。）は、教育の思想と原理A、B、Cの3コマを開講している。Aがこども発達学科用、Bが教育経営学科用、Cが体育学科用である。なお、Cのみ授業履修人数の関係から履修者を2クラスに分けて開講している。

本科目では、Bを担当する伊住と、Cを担当する田邊が、それぞれ担当する部分について先述したような問題意識を共有しながら、授業内容を共通化して実践した。本報告では筆者の担当回についての実践についてそれぞれが報告を行う。それらについては後に詳述するが、ここではどのような授業を展開しようとしていたのか、その構想について整理する。

まず、本科目は3人の教員がオムニバス形式で担当した。教育の思想と原理BとCを共通して佐々木が2コマ、酒井が5コマ担当し、残りの8コマをBは伊住が、Cは田邊が担当した。本報告については、特に筆者の担当回分について報告を行うこととしたい。

また、本科目は、教育の歴史的・制度的側面に触れながら、自分の言葉で「教育とは何か?」という問いに答える納得解を導くことができるようになることが目的である。その目的を達成するために、以下のような4つの目標を設定した。

- ① 学校教育に関わる様々なアクター（子供、親、教師）について、これまでの歴史の中でどのように制度的に位置づけられてきたのか自分の言葉で説明できる。
- ② 西洋、日本の教育思想と、その思想家や実践、著書、名言、それがその時代の教育にどのような影響を与えたのかについて自分の言葉で説明できる。
- ③ 「教育」がこれまでどのような制度で行われてきたのか、歴史的変遷について自分の言葉で説明できる。
- ④ 歴史的、制度的側面に触れながら、教育の役割について自分の言葉で説明できる。

このような目標を設定するために、「子ども」「家庭」「親」「学校」の4つのテーマについて履修学生の間で議論を深めることを目指した。議論は、2コマ連

続の授業時間を使って「探究」「整理」「発表」「解説」の4つのパートで構成した。それぞれ具体的には以下のとおりである。

- 「探究」では、グループを作り、受講生に対して上記テーマに関する「大きな問い」（例えば、「子ども」では、「大人と子供の境目はどこか?」等）を示す。その「大きな問い」に応えるために、「小さな問い」を示し、受講生はその「小さな問い」に対して十分説明するための材料を探すという作業を行う。
- 「整理」では、「探究」で集めてきた材料を基に、どのような思想家がでてきたか、どのような制度が作られたか等、グループごとに整理し、発表の準備を行う。
- 「発表」では、整理した内容を発表し、質問を受け付けながら議論を深めていく。
- 「解説」では、「整理」や「発表」で不足する内容について担当教員が補足し、知識の獲得を補助する。

このような授業を展開したのは、教育原理に関する概論を佐々木が講義し、その後酒井が西洋ならびに日本の教育思想について講義した後である。

以下では、伊住が担当するBと、田邊が担当したCの授業実践について報告を行う。

3. 「教育の思想と原理」Bの授業実践

第8回から第15回までの授業内容を表1にまとめた。以下、授業者が行った授業実践の第8回～第12回までを具体的に述べる。使用したテキストは、「新初等教育原理」（佐々木、2014）であった。いずれの授業でも授業の感想を書いたコメントカードを提出させたので、そのコメント内容を提示しながら、授業の進め方や学生の学びについて検討する。

3-1 第8回目の授業

第8回の授業では、今後の授業計画・授業の進め方の説明、プレゼンテーションの例示、テーマ決定を行った。

3-1-1 今後の授業計画・授業の進め方の説明

まず、本時から第15回までの授業の進め方を確認した。学生には、8回の授業を通して、「「教育」について自分なりの考えを深めることを求める」と伝えた。

そして、学生の主体的な学びを実現するために、テーマについてグループで調べたことをプレゼンテーションするという授業方法で進めると告げた。学生のグループは4, 5人を一組にして27組作った。様々な人と対話的な学びを促すため、組分け方法は履修名簿の学籍番号1～27番の学生を一人一組ずつ振り分け、以降、学籍番号順に各組に振り分けていった。

3-1-2 プレゼンテーションの例示

プレゼンテーションのやり方やスライドの作り方を示すために、授業者が「覚醒剤をなぜ使用してはいけないのか。」というテーマでプレゼンテーションの例示を行った。このテーマを選んだ理由は、①多様な根拠を基にプレゼンテーションができる、②学生に考えさせたいテーマであったためである。教育に関するテーマでプレゼンテーションをしなかった理由は、学生の思考を意図的に方向付けたり、制限したりしないようにするためであった。

3-1-3 テーマの決定

学生の主体的な学びを促すため、学生が「教育とは何か」に関するテーマを設定できるようにした。まず、3人一組で「教育」から連想する言葉をウェビングマップによって広げさせた。その後、グループで出された意見を共有するため数名を指名して発表させた。「教育」から連想された言葉として、「学ぶ」、「家庭」、「社会」、「指導」、「授業」、「先生」、「学校」、「テスト」、「体育」、「歴史」、「大人との関わり」、「未来を作る」等といった言葉が発表された。授業者は、パソコンの画面をスクリーンに投影し、学生から出された意見を入力することで言葉の広がり共有できるようにした。

ある程度意見が出された後、「教育とは何か」を考えるためにより深く考えたいテーマを3つ選びたい。何がよいか。」と学生に意見を求めた。すると、「先生」、「家族・親」、「学校」について考えを深めたいという意見が出されたため、その3つを今後の追究テーマとして設定した。調べる順番は、「先生とは何か」、「家族・親とは何か」、「学校の役割とは何か」の順とした。最後にコメントカードに本時で気付いたことや疑問に思ったことを書かせた。

コメントカードには、以下のような感想があった。自分達でテーマを主体的に決定したことや他者と対話することによって思考が広がったことを自覚していることがわかった。

- 教育から連想されるものは幅広いと思いました。例えば、私たちの班では教育→知識→読書・本→活字離れなど現代社会の問題に繋がりました。書くことによって、今、問題視されていることが明らかになりました。
- 本日の授業を通して新たな視点から「教育」について考えることができた。「なぜ・どうして」を追求することで、より考えを深めることができ、自分の意見をより良いものへと変えることができる。今後の活動では、自分だけでなく他者の意見を聞き、意見をより深めることができるよう取り組んでいきたい。

3-2 「先生とは何か」についての追究（第9・10回の授業）

第9回の授業では、「先生とは何か」についてグループで話し合わせた。授業の最初に、調べ方やまとめ方、プレゼンテーションファイルの提出方法について説明した。

表1 「教育の思想と原理」Bの第8回～第15回の授業内容

コマ数	内容
第8回	オリエンテーション（第15回までの授業計画の説明）、授業の進め方の確認、第1筆者によるプレゼンテーションの例示
第9回	「先生とは何か」に関してグループでの話合い
第10回	「先生とは何か」の学生のプレゼンテーション
第11回	「親・家族とは何か」に関してグループでの話合い
第12回	「親・家族とは何か」の学生のプレゼンテーション
第13回	「学校の役割とは」に関してグループでの話合い
第14回	「学校の役割とは」の学生のプレゼンテーション
第15回	「教育とは何か」に関してレポート作成

学生はグループに分かれて互いの考えを伝え合いながらテーマについて意見をまとめていった。メンバーが協力的で考えがうまくまとまるグループがある一方、意見の集約に時間が掛かっているグループもあった。

ファイル提出の締め切り後、授業者が内容面と表現面の2点を判断基準として優れていると判断したグループを9つ選んだ。1グループのみファイル提出ができなかった。内容面では、引用文献の信頼性や多様性を、表現面では、アニメーションや文字の大きさ・色遣いなどの適切さを判断基準とした。また、学生投票によって優れたプレゼンテーションを選べるようにするため、Googleフォームで投票できるように準備した。

第10回の授業では、まず、発表に選ばれたグループ番号と発表順をスライドで提示した。1つの発表に対して発表に選ばれなかった2グループが感想を伝えることを指示した後、5分程取り、グループでの打合せをさせた。その後、順番に発表させていった。様々な学生に人前で話をする機会を与えたいと思い、グループ全員で発表させた。

発表者は、「学力だけじゃなく、人間面の成長も助けてくれる人」、「良い意味で生徒に影響を与えたり、生徒の興味があることを伸ばしたりその方向へ導く人であり、自分が師事したいと思う人」、「先生」とは生徒たちにとって「第二の親」である」等と述べ、その根拠を書籍やインターネット、講義資料等から引用して主張していた。例えば、「先生とは生徒の鏡である」と主張したグループでは、「教育心理学」の講義で学んだバンデューラのモデリング理論を基に教師の言動を児童生徒が模倣する仕組みや、「世界最高の学級経営」(Wong & Wong, 2017)を紹介し、教師の前向きな期待が児童生徒のやる気に影響を与えると主張していた。9グループが発表後、学生が一番納得できたプレゼンをGoogleフォームで投票させ、投票結果をすぐにスライドでフィードバックした(図1)。

フィードバック後、発表されたプレゼンテーションの中で優れていると感じた点を価値づけた。特に、多様な資料を引用して発表すること、信頼性の高い研究論文や書籍を基に主張することで説得力が増すと伝え、次回の発表に生かすよう促した。学生の発表内容は、「先生は学習支援と人間形成に寄与する」との主張が多かった。そこで、教師は虐待児童の発見や社会的にドロップアウトしがちな家庭と他の機関をつなぐといった児童の生命を守っていることを伝え、教師が

社会的基盤を支える重要な役割を担っていることを補足した。

以下に第9回と第10回の学生のコメントカードを紹介する。これらの感想から、グループでの対話的な学びが促されたり、説得力を増す引用文献の選択について学びを深めたりしていることがわかる。このことから、講義の中で意図的に指導していることが学生にも伝わっている様子がうかがえた。

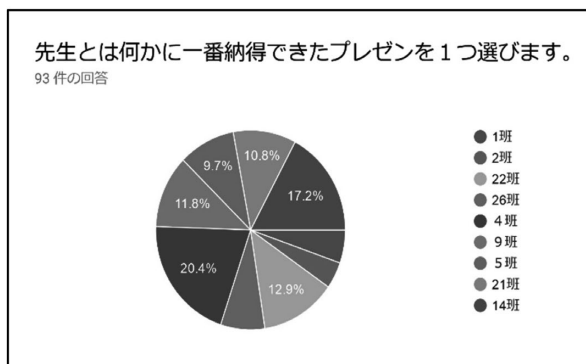


図1 「先生とは何か」のプレゼンの学生投票結果

[第9回のコメントカードより]

- 今回、グループで先生とはと調べてみて教師の言動や行動が子供たちにすごく影響があることがわかり将来の年取さらに10代の望まない妊娠などにもかかわることを知り驚いた。なので気を付けて指導することや子供たちの未来を背負っているという自覚をもつことで教師という仕事に魅力を感じ一生懸命取り組めるのではないかと考える。
- 先生とは何かについて班のみんなで話し合いながら先生のことについて調べましたが、なかなか思っているより時間がかかりとても苦戦しました。一人一人がしっかり調べて理解するというのもでき、みんなで考えた事をパワーポイントでまとめて良いものを作っていきたいと強く思いました。

[第10回のコメントカードより]

- 各班の発表を聞いて、自分のグループにも取り入れたい工夫がたくさん見つかった。私のグループは、根拠のところに、インタビューしか入れていなかった。次回以降は、インターネットや、本など、複数の情報を取り入れていきたいと思う。
- 自分たちのパワーポイントと選ばれた班の違い

がよくわかりました。理由が複数あることや、明確であること。これを次からは意識しようとおもいます。いろいろな意見を聞くことによって、さまざまな考え方を取り入れ、先生とはなにか、深く考えられたと思います。

3-3 「親・家族とは何か」についての追究（第11・12回の授業）

第11回の授業では、「親・家族とは何か」についてグループで話し合わせた。この授業は、他の授業の関係で欠席している学生が多く、メンバーがほとんどいないグループもあり、十分に話し合いができないグループもあった。

まず、よりよいプレゼンテーションにするために内容面と発表面で意識して欲しいことを伝えた。内容面では、①多様な根拠を示すこと、②思想的（哲学者・教育者の考え）・原理的（理論・原則）な意見を引用することで説得力が増すこと、③そのために教科書や他の書籍などの情報源が重要となること、④インターネットの情報に頼り過ぎると他の班と内容が重なること、⑤言葉の意味を明確にすることを指導した。発表面では、①スライドには凝ったアニメーションやスライドのデザインは不要であり、シンプルにまとめること、②1スライドの文字数は視覚的に捉えられる範囲を目指すことを指導した。

第12回の授業でも、第10回の授業と同様の流れで授業を行った。この授業では7グループを選んで発表させた。2グループがファイルが遅れて提出したが全てのファイルが提出された。発表したグループの意見には、「子どもにコミュニケーション能力や、生きていく力を身に付けさせ、子どもがやりたいことを見つけさせる存在」、「家庭は1つの学校であり、親は先生である。」、「心の拠り所であり、帰りを待ち続けてくれる場所であり、子供の根本的な人格形成が行われる場所」などのように、親や家族が人格形成に影響を与える重要な存在であるという主張が多く見られた。発表の中には、これまでの講義で学んだコメニウスが主張していた幼児期の学校プランについての言説やロックのジェントルマン教育に触れながら、家庭教育の意味や重要性を主張するグループもあった。7グループが発表後、学生に一番納得できたプレゼンを投票させ、結果をすぐにフィードバックした。

フィードバック後、選ばなかったプレゼンテーショ

ンの特徴を2点指摘した。1つは、根拠となる資料が信頼性に欠ける場合である。3つのグループが狼に育てられたアマラ・カマラの話を用いていたが、この話は虚偽であるとの指摘がなされているため（鈴木、2015）、信頼性に欠けると伝えた。

もう1点は、主張の根拠についてである。グループの中には、親や家族を樹木等、他の何かに例えて主張しているものもいた。そこで、まず、こうした何かに例える思考をアナロジー思考と言い、創造力を広げる重要な思考であると価値づけた。しかし、学生のプレゼンテーションでは、家族と樹木の類似点を述べるのみであり、なぜ、家族が子供の成長に影響を与える背景について説明されていない点が課題であると指摘した。最後に、家庭が多様化している中で、学校は対応できているのかと問いかけることで、次時の「学校の役割とは何か」に意識を繋げられるようにした。

以下に第11回と第12回の学生のコメントカードを紹介する。これらの感想から、学生は多様な資料を参照し、自分達の主張に説得力をもたせようとしていることがわかる。また、学生の中には、家庭教育が子供の人格形成に多大な影響を与えていることに納得しているものもいて、家庭教育の重要性に気付いている様子がうかがえた。

[第11回のコメントカード]

- 人数が少ないため根拠の具体性を高めることができなかった。親は教育において重要な立ち位置にあるが、教育における家族の存在意義を見出すことができなかった。授業テキストも情報が少ないので論文などを利用していきたい。
- 家族・親について考えていくなかで、さまざまな参考書や資料を見て、また哲学者の考えも知ることができました。その中で、親は教育の目的である「人格の形成」に大きくかかわっていると思いました。班のみんなと意見交換しながら考えることができたので、これをパワーポイントにしっかりまとめたいです。

[第12回のコメントカード]

- 「家庭・親とは」、今日の7グループの発表を聞いて、ひとことでいうと人格形成に影響を与える存在ではないかと思った。最後の班の発表の中での自己実現欲求を満たすために向上心が必要で、そのためにまず低次の欲求を満たすための家庭・親というのがとても論理的でしっくりきた。

- 聞く側に回って聞いていると、ちゃんと発表の内容を理解して話している人とそうでない人の差がよくわかったので、しっかり理解することの大切さを感じた。先生が最後におっしゃっていた、家庭が多様化している中での学校の制度についての投げかけがとても頭に残りました。

4. 「教育の思想と原理」Cの授業実践

4-1 授業ガイダンス

担当する回の初回を使って、先述したように授業を展開していく旨や、評価の方法等について説明するガイダンスを実施した。

同時に、「教育の原理」に迫っていくために、具体的なキーワードを履修学生から引き出したいと考えた。そこで、数人のグループを作り「教育に関する言葉」を可能な限り提示していくことができるよう、いわゆる「山手線ゲーム」を、アイスブレイクを兼ねて実施した。

授業者は各グループで出てきた「教育に関する言葉」を整理しながら、本科目の担当回で取り扱いたい「子ども」「家庭」「親」「学校」の4つのキーワードに集約していった。教科の名称や、学校に設置される施設設備の名称を挙げるグループが多かったが、おおむね上記4つのテーマに集約することができた。

4-2 「探究」におけるテーマの設定

探究は以下、3つの大きなテーマを設定した。

- | |
|--|
| <p>「子ども」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大人と子どもの境界線はどこか？ <p>「家庭」「親」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを教育するのは誰の仕事か？ <p>「学校」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校はなぜ必要なのか？ ・学校はなぜ必要ではないのか？ |
|--|

なお、グループについては事前に授業者がランダムに通し番号を振り、最大5名のグループとなるよう名簿を作成し、当日発表する形でグループ分けを行った。

上記のテーマは、最初のテーマである「子ども」の「大人と子どもの境界線はどこか？」に関してグループごとでまとめ、発表した結果、それぞれのテーマを

決定した。次項で報告を行うが、「大人と子どもの境界線」について各グループで「探究」する中で、日本の学校教育の歴史、国際的な成人年齢の規定、「子供料金」の設定年齢等の社会的な子どもの位置づけ、教育思想家の考える「子ども像」等について発表があった。

そうした「探究」の過程の中で、多くのグループが「自律したら子ども」「親の手を借りなくなったら大人」といった結論を導き、子どもから大人へ成長していく過程で、親、保護者、学校、教師といった様々な人間と関わるといった内容を盛り込んでいた。そこで、次の「家庭」「親」のテーマでは「子どもを教育するのは誰の仕事か？」を設定した。

また、次の「学校」に関するテーマにおいては、「子どもを教育するのは誰の仕事か？」について整理する中で、イヴァン・イリイチの『脱学校の社会』等を引用しながら、「学校は不要」「必ずしも教育は学校のみで行われるものではない」といった結論を導くグループが出てきたため、最後の「学校」に関する「探究」については、「学校は必要か、不要か」といったディベート形式で実施することとした。

4-3 「発表」における受講学生の様子

「探究」の活動では、グループごとにそれぞれにテーマについて、パワーポイント等で発表資料をまとめることを行った。



図2 発表スライドの例①

上記の図2のように、「大人と子供の境界線はどこか」というテーマについて、「社会的な観点」から、つまり、遊園地や映画館、乗り物に乗る際の「子ども」の年齢について整理することで、その境界線について説明しようと試みたグループがあった。



図3 発表スライドの例②

「子どもを教育するのは誰の仕事か」というテーマについては、上記の図3のように、様々なアクターを列挙し、それらについてどのような役割を担っているか、歴史的、制度的な側面から整理するグループ等があった。

4-4 本授業を通して育てたい力

本授業は、先述しているとおり教員免許状を取得するために「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を取り扱う科目である。しかし、知識のみならず、授業方法を工夫することで、教員に必要な「実践的指導力」具体的にここでは「課題対応能力」を身に付けることを意図して、授業を実践してきた。

グループのメンバーをランダムに設定することにより、今まで話をしたことのない学生同士で話し合いを行い、理由を付けて結論を導かなければならない。このような活動を通してコミュニケーション力等が身に付くと考えた。

5. 今後の課題

5-1 「教育の思想と原理」Bの課題

本実践報告では、伊住が行った第8回～第12回目までの授業実践を報告し、コメントカードなどを基に学生の学びをまとめた。その結果、プレゼンテーション中心の授業スタイルによって、主体的、対話的で深い学びを実現できる可能性が示された。

しかし、実践する中で課題もあった。まず、資料の読解力である。学生には、テキストの活用や書籍や論文の引用を推奨していた。しかし、テキストや論文の文章は学生にとって、読み慣れていないため、根拠として引用することになり難しさを感じているようだった。そのため、学生が引用した資料は、インターネットの情報や自分たちの経験談・インタビューなどに偏りがちであった。今後、学生の読解力に合わせた

テキストの選定をする一方、テキストを読み解くための読解力もつけていく必要があるだろう。次に、プレゼンテーションのやり方である。学生は発表当日に自分達がプレゼンテーションすることを知ることになった。そのため、グループによってはスライドを読み上げるだけになったり、人任せの学生がいたりする発表もあった。

指導の改善として、発表に選んだグループに事前に連絡し、プレゼンテーションの準備をさせることも効果的だろう。しかし、当日発表がわかったとしても、伝わりやすくプレゼンテーションができる学生を育てたい。そういった学生への願いも語りながら、多くの学生にプレゼンテーションに慣れさせる機会を設定していくことも今後必要だろう。

5-2 「教育の思想と原理」Cの課題

先述のように、田邊が実施した第8回から12回目までの授業実践を報告した。

今回取り扱った「子供とは?」「大人とは?」「学校とは?」といった問いは様々な視点で捉えることができ、授業者が想定しなかった視点を提示するグループが出現するなど、「深い学び」を実践することが可能であることが示唆される。しかしながら、広範な内容を包含する問いであるが故に、何から手をつければ良いかわからないグループが出現したこともまた事実である。明確な唯一無二の答えを導くことができない問いを取り扱わなければならないという授業の性質上、授業者は受講生に対して問いの設定、問いに対する答えを導くための見通しを持たせるなどの支援が必要不可欠であるといえよう。

また、今回の授業においては、グループ分けを無作為に行った。そのため、グループ内で意思決定を他者に委ね、作業や議論への参加にやや消極的な学生が出現することとなった。授業コメントにおいても、改善を求める声が上がった。次年度以降についてはグループ分けの方法について吟味し、グループ内の学習意欲が喚起できる方法を選択したい。

【脚注】

(1) 環太平洋大学における「教育の思想と原理」の教員免許状取得上の科目の位置づけは、教育職員免許法施行規則にある「教育の基礎理論に関する科目」のうち、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を取り扱うものとして開講している。

(2) 例えば、「NII学術情報ナビゲータ」通称「CiNiiサ

イニィ」で「教員養成, 方法」で検索を行うと, 1,035件の論文が, 「教員養成, 実践」で検索すると3,731件がヒットする。

【引用文献】

- 飯島広美・岡田珠江 (2019). 「教員養成課程における『授業力』の形成と向上のための方策 (3) - 教材研究から模擬授業・振り返りまでのサイクルモデル -」『湘南工科大学紀要』第53巻第1号, pp. 91-104.
- 松永豊・梅田恭子・磯部征尊・齋藤ひとみ (2019). 「教員を目指す学生に対するプログラミング教育の指導法について」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第4号, pp. 91-96.
- 佐々木正治 (2014). 『新初等教育原理』, 福村出版.
- 鈴木光太郎 (2015). 『増補オオカミ少女はいなかった: スキャンダラスな心理学』, 筑摩書房.
- Wong, H. K., & Wong, R. T. (2017). 『世界最高の学級経営 (稲垣みどり, 訳)』, 東洋館出版社. (Wong, H. K., & Wong, R. T. (2005). *The first days of school: How to be an effective teacher*. CA: Mountain View.)